

西方の遍路を迎える太山寺



愛媛大学法文学部教授
四国遍路・世界の巡礼研究センター長
胡 光
(えべす ひかる)

九州からの遍路、四国上陸

弘化2年(1845)2月22日、筑前国津屋崎村(福岡藩領/福岡県福津市)を出発した豪商・佐治家一行は、萩、岩国、宮島見物を経て、ようやく3月15日に三津浜(松山市)へ上陸しました。残された「四国日記」(佐治家文書、福岡県立図書館保管、佐治洋一氏蔵)を読み解きながら、最新の研究成果もふまえて、四国を旅してみます。

三津浜では、顔なじみの問屋下松屋の裏座敷に無料で泊めてもらい、「よき町」と記します。翌朝、三津浜を発ち、五十二番瀧雲山太山寺に「初札奉納」を果たします。二王門(重要文化財)や本堂(国宝)の荘厳さや茶屋の賑わいも書き留めています。



国宝太山寺本堂(鎌倉時代建立)

炭焼小五郎伝説を伝えた九州の遍路

平成25年(2013)愛媛大学と愛媛県美術館は、太山寺の全ての資料について合同調査を行いました。その成果について紹介します。

当寺の創建は、用明天皇2年(587)豊後国の真野長者が海難を逃れた礼に一夜建立し

たと伝えられています。四国霊場の開基は、行基菩薩か弘法大師とされることが多いなか、唯一の事例です。

調査では、5種もの縁起(歴史を書き上げた巻物)が発見されました。室町時代の縁起には、天平年間(729-749)に行基が創建、河野家によって本堂建築・修理が行われたことが記されます。江戸時代に入り、明暦2年(1656)縁起には、天平の開基後、弘法大師が納札し、八十八ヶ所随一の霊場となったこと、享保元年(1716)縁起には、山頂に十一面観音が出現したこと、大師の修行場があることが加わり、八十八ヶ所の成立と弘法大師信仰隆盛の様子がうかがえます。

そして、享保17年(1732)縁起が、四国遍路に来た豊後蓮城寺(大分県豊後大野市)の僧から伝えられます。ここには、豊後の炭焼小五郎が真野長者となり、豊後蓮城寺、周防般若寺(山口県平生町)、伊予太山寺に関わった話が初めて語られます。今日に至る太山寺の史話を創ったのは、九州からの遍路だったのです。

このころ、西方から来る遍路が増えていたことが太山寺文書からもうかがえます。享保8年、松山藩は遍路の上陸を三津浜だけでなく、高浜も許可したのです。太山寺の炭焼小五郎伝説は、九州における四国遍路や弘法大師信仰の広がりによって誕生したのです。

太山寺の落書

本堂に上る最後の長い階段の登り口に手水鉢があり、その奥に子安観音が祀られた観音堂があります。千羽鶴などが奉納された様子からは今日の篤い信仰を知ることができます。現在の観音堂の右脇に江戸時代の旧観音

堂が残されており、柱や羽目板に多数の落書が確認できます。目前の石段を上り詰め、楼門をくぐると本堂に至ります。本堂の右手前に鐘楼があります。南北朝時代の永徳3年（1383）に豊後（大分県）の人が造った梵鐘は県指定有形文化財です。現在の鐘楼は、天保3年（1832）に太山寺村百姓が中心となって三津浜石工の協力で建立したものです。奥板には地獄絵図が展開し、建立以来人々が身近に楼内に入ったことが想像されます。この内壁には、多数の落書が書き重ねられています。



鐘楼の落書調査

名前・年月日・出身地が記された落書は、合わせて372件を確認しました。年次では、本尊開帳があった天保年間（1830-1844）が最も多く、出身地を現在県名にあてはめると、愛媛・山口・広島・大分県が上位にあり、対岸からの遍路が多いことが分かります。



観音堂の落書

当時の落書は、神仏の加護を祈るもので、上陸して最初の札所に、期待と不安で真剣に名前を刻んだ遍路の姿が思い浮かびます。

太山寺にある圧倒されるほどの落書は、西

方の遍路を迎える同寺の役割を示していたのです。八幡浜にも遍路の上陸記録があり、一番札所霊山寺（徳島県鳴門市）から始める今とは異なり、西方の遍路を迎える伊予の霊場の特徴を垣間見ることができます。

お接待の登場

「四国日記」に戻り、太山寺境内の様子を見てみましょう。本堂の左に茶堂があり、ここで、北川原村（松前町）政左衛門から「摂待」（接待）を受けます。内容は、赤飯、煮物、漬物、月代（髪結い）でした。

四国へ上陸すると、接待の記録が現れます。接待の内容、施主まで詳細に記され、日々の最後には、納めた札数（参った札所数）と接待数が集計されています。まさに接待は、四国遍路の特徴であることを当時の人も認識していたのです。豪商一行にとって、接待を受けずに旅をすることは可能でしたが、接待を受けることも遍路には重要であって、施主も名乗り、ともに弘法大師の加護を期待するものでした。

日記全編をひもといてみると、接待の内容は、香物（漬物）21件、赤飯18件、月代髪結い7件、銭5件、唐豆類5件、煮しめ4件、餅2件、草鞋2件があり、白飯・焼米・ひきわり飯・弁当・はったい粉・唐黍・薬・茶・豆腐・吸物が各1件記されています。食料が多いものの遍路に必要な全てのものが揃っていて、接待する側も、遠方からも札所や遍路道に出向き、身の丈に合った、できる範囲での接待を行っていることが分かります。

接待は、江戸時代から続く、生きた四国の文化なのです。

【参考文献】

塚本明・近藤浩二・胡光「巡礼と『道中日記』の諸相」『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014

愛媛県歴史文化博物館『空海の足音 四国へんろ展 愛媛編』、2014

愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020